25journal
society&business Tokyo25 journal
執筆協力 編集室システムU　okamura.nobuyoshi@gmail.com

都内唯一「檜原風穴」を視察

檜原村長や教育長、吹き出す冷風を体感

檜原村の吉本昂二村長、久保嶋光浩教育長、風穴研究者、地質学者など15人が参加した「檜原風穴」の視察が8月4日に行われた。風穴内の低温度や吹き出す冷風を体感。保存と活用法に思いを巡らせた。

風穴は山腹などにあり、穴の奥には蚕種の貯蔵庫を再現している。

都内唯一の「檜原風穴」は柏木野集落近くから数百㍍登った山腹にある。郷土史家や研究者らの調べによると、1号から3号の風穴が確認されている。

あきる野の「伊奈石の会」の調査では、1号は崩壊が進んでいるが、石積みからその規模は推定できる。2号は1号より少し小さいが、2つの部屋に分かれている。3号は最も大きく、石積みもよく残っている。明治後期に建設され大正時代後期くらいまで稼動していたと推測できるという。

これまで村議会の一般質問で取り上げられたこともあり、村は自然を生かした歴史・文化的施設として、一定の価値を認めている。

ただ、私有地のため文化財指定などの際には所有者の承諾が必要になるという。

視察当日は、外気温が35℃の猛暑の中、風穴内は8℃だった。吉本村長は「文化、歴史的価値、観光資源にも」と関心を示した。

柏木野集落にある「檜原風穴」を視察する一行

戦後80年　羽村で平和を願い「被爆樹木2世」アオギリ植樹

戦後80年の節目を迎えた今年、羽村市が8月17日、平和のシンボルである「被爆樹木2世」の苗木を「ヒノトントンZOO（羽村市動物公園）」（羽村市羽）に植樹した。

エントランス付近で行った植樹式には橋本弘山羽村市長、富永訓正羽村市議会議長らが出席した。長さ30㌢ほどの苗木を同市長らが丁寧に植樹し、水をやった。

平和を願い植樹する橋本市長（左）ら

「被爆樹木2世」の植樹は、核兵器のない平和な世界の実現を目指し世界中で9000近い都市が加盟する平和首長会議が取り組む事業の1つ。未来を担う子どもたちの平和意識の醸成などを目的とする。

植樹式で橋本市長は「被爆アオギリ2世が羽村の地で大きく育ち、平和への願いを末永く伝えて行くことを願っている」とあいさつした。

アオギリの親木は、爆心地から約1300㍍の距離にある旧広島逓信局（広島市）の中庭で被爆。被爆しながらも生き残った樹木から採取された種子が発芽し、育ったのが2世の苗木で、平和の象徴、生命の尊さを伝えるものとして日本各地で植樹されている。

4月に就農、枝豆を初出荷

青梅市の磯田茉莉夫さん

鮮度の良いものを都民の食卓へ

青梅市今井で「BLUMEFARM（ブルーメファーム）」を営む磯田茉莉夫さんは4月に就農したばかり。6反の農地で枝豆を中心に野菜を栽培。6月に初めて出荷した。今後はトウモロコシや落花生の栽培にも力を入れていくという。

世田谷で生まれ、小学生時代は三重県伊賀市で育った。学校行事で農業体験があり、その時の里山の原風景は忘れられないものになった。

前職は外国人材関係の仕事。コロナ禍をきっかけに将来を考えた際、自然を相手にした仕事をしたいと思った。2023年4月から東京農業アカデミーで2年間学んだ。趣味のアウトドア等で何度も青梅市を訪れるうちに自然の豊かさと人々の暮らしが融合したところに魅力を感じ、就農先を青梅に決めた。

収穫した枝豆を直売センター等に出荷し、「すごくおいしい」との声を直に聞いたとき、都市農業ならではの手応えを感じた。一方で生産能力を高めるため効率を上げるなど課題も見えた。

大消費地に近く鮮度の良いものを届けられるのが都市農業の魅力。「生産力を高めるために効率化、機械化が徹底できるかが勝負。鮮度が大事な枝豆やトウモロコシを都民の食卓に届け、より多くの人に感動を味わってもらうのが夢です。地域とのつながりを大事にし、農業の幅を広げたい」と前を向く。

◆情報提供は090（8460）9688

収穫した枝豆を抱えた磯田さん